はじめに

新宮市教育委員会　教育長　速水盛康

新宮市では毎年十一月に「差別をなくする強調月間」として様々な取り組みを行っております。「街頭啓発」、「市民のつどい・ふれ愛講座」の実施、「人権尊重作文・春を呼ぼう」の作成をしております。今回、取り組みの一つである人権作文集「春を呼ぼう」を市内の小・中学校の先生方のご指導とご協力により、発刊する事ができました。

児童生徒には、自分自身のこと、家族のこと、友達のこと、社会で起きている問題のこと等、各々が感じた大切なことに目を向け、温かい心のこもった作文を書いていただきました。

児童生徒自身の感性と、豊かな表現をもちいた作文は、素直な心があふれ、子どもの目線による「人権」について語られており、改めて「人権」についての大切さを気づかされる部分が大変多く、次代を担う子どもの健やかな成長が感じられます。

さて、最近ニュース等では、子どもの虐待や育児放棄等の問題、ＳＮＳ等インターネットによる事件などが連日のように報道されています。また一方では、多様性について個々の存在を認め合う社会的環境が醸成されつつあります。ともに社会的支援と理解が求められます。学校はその現実社会の狭まで、子どもたちと向かい合います。

この人権作文には子どもたちの生活や学校、地域社会の環境が反映されているといえます。今一度、子どもたちの声に耳を傾け、私たちも身の回りの人権について振り返りたいものです。

皆様方におかれましては、この人権尊重作文「春を呼ぼう」を読んでいただいて、子どもたちが安心して幸せな生活を送ることができる、明るいまちづくりをめざすために、「人権」について少しでも考えるきっかけとなれば幸いです。

おわりに、この文集発刊に当たり御尽力をいただいた市内小中学校をはじめ関係者の皆様方に対し、心から感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

もくじ　『春を呼ぼう』第15集

★小学生の部★

わたしのきょうだい　神倉小学校一年
うまれさせてくれてありがとう　王子ヶ浜小学校一年
ぼくのおとうと　熊野川小学校二年
一年生　高田小学校二年
ぼくたちの命　神倉小学校三年
みんなといっしょに　王子ヶ浜小学校三年
家族について　熊野川小学校四年
お母さん、いつもありがとう　三輪崎小学校四年
兄とぼく　高田小学校四年
ありがとう　神倉小学校五年
もっともっと　三輪崎小学校五年
もっといい高田へ　高田小学校五年
あいさつの大切さ　王子ヶ浜小学校六年
勇気をもって　熊野川小学校六年
三つの約束　三輪崎小学校六年

★中学生の部★

向き合う　高田中学校一年
家族がいる幸せ　光洋中学校一年
当たり前の日常　緑丘中学校一年
差別　熊野川中学校一年
「ひめゆり」が教えてくれたこと　高田中学校一年
お互いの良さを認め合えるように　近畿大学附属新宮中学校二年
高齢者について　光洋中学校二年
戦争を体験しなかった私たち　城南中学校二年
私たちにできること　近畿大学附属新宮中学校二年
人それぞれの見方　熊野川中学校二年
パラリンピック　城南中学校二年
声をかける勇気　近畿大学附属新宮中学校二年
みんなで生きていく　緑丘中学校二年
私が望む世界　高田中学校三年
温かい家庭から笑顔一杯の社会に　光洋中学校三年
身近な障がい者に目を向ける　緑丘中学校三年
知り、意識することの大切さ　熊野川中学校三年

はじめに　新宮市教育委員会教育長　速水盛康

小学生の部

わたしのきょうだい

神倉小学校一年

わたしには、二ねんせいのおねえちゃんと、小さいおとうとがいます。わたしは、二人とも大すきです。

おねえちゃんは、学校がおわって、おうちにかえったら、りかちゃんにんぎょうであそんでくれます。わたしは、とてもうれしいです。おねえちゃんは、おかあさんのおてつだいもしています。じぶんから、

「やりたい。」

といっていて、すごいなあとおもいます。わたしも、おねえちゃんみたいに、やりたいです。

おとうとは、あまえんぼうです。わたしがいると、

「あしょぼ。」

って、さそってきます。かわいいから、あそんであげます。アンパンマンのおもちゃであそんであげます。おとうとは、たのしそうなので、わたしもたのしくなります。

おとうとが大きくなったら、いっしょにこうえんにいって、いろんなことをしてあそびたいです。三人であそんだら、もっとたのしくなるとおもうので、これからもいっぱいあそびたいです。

うまれさせてくれて　ありがとう

王子ヶ浜小学校一年

学校で「じぶんのいいところ」「じぶんのすてきなところ」をあつめた、クリスマスツリーをつくりました。

はなちゃんが、わたしのことを「おもしろいね。」ってかいてくれました。うれしかったです。

ゆずきちゃんが、わたしのことを「字がうまいね。」ってかいてくれました。めっちゃうれしかったです。

ゆうたくんが、わたしのことを「いろいろ、しんせつにしてくれたね。」ってかいてくれました。めちゃめっちゃうれしかったです。

わたしは、ごうくんに「はしりがはやいところが、かっこいいね。まねしたいです。」ってかきました。ごうくんは、「めっちゃかいてくれたある。ありがとう。」っていってくれました。こころがうれしくなりました。

つぎの日は、おうちの人たちから、ほしのおてがみがとどきました。おかあさんは、「みんなのことをきにかけてくれる、やさしいきもちがすてきです。」とかいてくれました。

おとうさんとおにいちゃんは「おべんきょう大すきなところが、すてきだよ。」ってかいてくれました。

じいじとばあばは、「大きいこえでわらって、いつもたのしそうなえがおが大すきだよ。」って、かいてくれました。

じぶんがうれしかったのは、ぜんぶです。ほんとうにうれしかったです。とてもとってもうれしかったです。うまれさせてくれて、ありがとう。

わたしは、まい日、げんきにたのしく学校にきています。じゅぎょう、たのしくしてるよ。おともだちもいっぱいいるよ。うまれてきて、よかったです。

ぼくのおとうと

熊野川小学校二年

ぼくには、はるきというおとうとがいます。

ぼくは、きょうの朝、はるきとけんかしてしまいました。ぼくは、はるきよりおそくおきてきました。すると、ぼくが買ってもらった　くろのあったかい　うわぎを、はるきにとられてしまっていました。はるきには、みどりのうわぎがあるのに、と思いました。それから、おかあさんが、

「朝ごはんに、食べるパン、何パンにする。」

と聞きました。すると、はるきは、また、ぼくと同じパンをえらんだので、けんかになりました。ぼくは、ちがうパンにしました。

そして、ぼくは、一人で、レゴであそんでいたら、はるきに、

「入れて。」

と言われたけど、ぼくは、一人であそびたかったから、

「いや。」

と言いました。そして、はるきは、

「けち。」

というようなことばを　言ったけど、ほっときました。ぼくは、いやと言ったのが、はるきにわるいなと思いました。それで、おかあさんに見つからないように、はるきに、

「ごめん。」

と言いました。はるきも、

「ごめん。」

と言いました。ぼくは、

「いいよ。」

と言いました。はるきも、

「いいよ。」

と言いました。そして、さいごに二人でレゴであそびました。

はるきには、やさしいところがあります。なぜかというと、はるきが、本を読んでいるとちゅうに、

「かして。」

と言うと、かしてくれるからです。

ぼくは、やさしいおとうとがすきです。

一年生

高田小学校二年

一年生は、がんばっています。一年生は、体いくのときに体そうをがんばっています。

一年生は、きゅう食をおいしそうに食べています。

一年生は、べんきょうがじょうずです。

少し前にさん数で「三つの数のけいさん」を一年生がべんきょうしていました。むずかしいけいさんですが、がんばってタイルをうごかしたり、ノートに書いたりしていました。それを見てわたしは、「きちんとこたえをもとめているんだな。」と思いました。

書しゃの時にもゆっくりと書いています。
いっしょにしゅくだいをやっているときに分からないところを教えてあげます。分かったら、「ありがとう。」と言ってくれてうれしいです。
一年生は、学校をがんばっています。
一年生は、いつも元気でわたしはあんしんします。
一年生は、あそぶときにたのしそうにあそんでいます。
昼休みにドッチボールをしたときに、一年生がボールをじょうずになげたり、とったりするのを見て、「すごいな。」と思います。
一年生は、そうじをがんばっています。
そうじのとき、大きい人に教えてもらって、きれいにそうじをしています。そうじのふりかえりもがんばって言っています。だんだん長く言えるようになってきました。
わたしは、一年生と話をすることが大すきです。なぜかというと、話をするとたのしいと思うからです。一年生と話すことがすきです。つぎの一年生が来たら、いっぱい教えてあげてね。
これからも元気いっぱいで、べんきょうなどをがんばってね。

ぼくたちの命

神倉小学校三年

ぼくは、みんなの命について話します。ぼくらはみんな、お母さんとお父さんがけっこんしたから生まれています。お母さんとお父さんは、ぼくらから言えばおじいちゃんとおばあちゃんがけっこんして生まれました。

ぼくが命のことを考えるようになったのは、「ちいちゃんのかげおくり」のべん強をしたからです。ちいちゃんはせんそうの時代に生きていました。家族みんなでかげおくりをしていましたが、せんそうがはげしくなって家族とはなればなれになってしまいました。ひとりぼっちになってしまったちいちゃんは、一人でかげおくりをしながら命が空に消えていくというお話です。たった一つのちいちゃんの命が消えてしまいました。そしてちいちゃんの命やたくさんの人の命がつながらずに消えていくのがとても悲しいと思いました。
ぼくたちが生きている今の時代は、家族といっしょにすごせたり、おいしいごはんが毎日食べられたりします。ぼくは今の時代が幸せだなと思います。
せんそうの時代にはたくさんの人がなくなったけど、ぼくのひいおじいちゃんやひいおばあちゃんは生きていました。たいへんなせんそうの時代を生きていてくれました。そして、お母さん、お父さん、ぼくが生まれました。そうやって昔から命がつながって、ぼくらが生きています。もしだれか一人でも命がかけていると、今ぼくはここにいなかったと思います。ひいおじいちゃんとひいおばあちゃん、そのもっともっと前のおじいちゃんとおばあちゃんも生きていてくれたから、今ぼくはここにいます。
ぼくは、もう一つ「ありがとう」と思っていることがあります。それはお母さんがぼくを生んでくれたことです。お母さんはくるしいのにぼくを生んでくれました。そのおかげでぼくはここにいます。
お父さんとお母さんがけっこんしていなかったら命のつながりが消えていて、ぼくたちはみんな今、生きていなかったかもしれません。ぼくは生まれてこれてよかったです。
だから、お母さん、お父さん、ありがとう。

みんなといっしょに

王子ヶ浜小学校三年

毎日、楽しみにしている給食ですが、ぼくは、アレルギーがあって、みんなと同じ物を食べることができません。食べられない物は、たくさんあります。それは、牛にゅう、小麦、たまごです。食べると、ものすごくかゆくなったり、顔がはれたり、息がくるしくなったりします。

「何でぼくは、アレルギーなんだろう。」

と、悲しくなります。

お医者さんにも、お母さんにもわかりません。

ぼくは、田なべの病いんに通っています。先生に、小麦、たまごを食べる練習をするように言われてから、ぼくは、がんばって練習しています。

はじめは、たまごの黄身を食べる練習です。毎日、少しずつ食べてまるごと一こ食べられたらゴールです。たまごの黄身は、まずくて二回はいてしまいました。でも、がんばりました。お母さんもおうえんしてくれたので、一ヶ月ぐらいたった時、やっとゴールできました。よかったなと思いました。うれしかったです。

次は、うどんです。色んなパスタソースをつけて食べました。ゴールの一パック目ざして一生けんめい食べました。これもゴールにたどり着きました。牛にゅうも飲めるようになり、うれしかったです。でも、これで終わりではありません。これからも練習をつづけないといけないし、次に、たまごの白身にちょうせんしないといけません。白身は、一番アレルギーしょうじょうが起こります。これが食べられるようになったら、アレルギーは全部なくなるのです。

ぼくは、みんなといっしょの食べ物を食べたいので、これからも食べる練習をがんばりたいと思っています。家族も、友だちも、先生もおうえんしてくれるので、きっとゴールできると思います。早くみんなといっしょの食べ物を食べたいです。

家族について

熊野川小学校四年

わたしの家族は、六人家族です。

お父さん、お母さん、わたし、弟、妹が二人います。お母さんとお父さんは、仕事をしています。お父さんは老人ホームではたらいていて、お母さんは歯医者ではたらいています。上の妹は三つノ保育所に通っていて、下の妹は新宮にあるマリア保育園に通っています。

お母さんは家に帰ってくると、いつもいそがしそうにしています。そんなお母さんを少しでも助けたいと思っています。お母さんはわたしのために色々な事をしてくれます。ごはんを作ってくれたり、わたしがほしい物や好きなおかしを買ってくれてうれしいです。お母さんはたまにおもしろいことをしてくれます。変な顔をしてくれた時は、とてもおもしろいです。そんなお母さんが大好きです。

次は、お父さんのことをいいます。お父さんも変な顔をしておもしろいことをしてくれます。たまにしてくれます。お父さんもとてもやさしいです。遊んでくれたりもします。

次は、弟のことをいいます。弟は、せん風機が大好きです。弟はせん風機のねじとかカバーとかをはずしている動画をとったりしています。

次は、上の妹のことをいいます。妹は五才です。アクセサリーとかマニキュアとかが大好きです。たまにかがみを見ながらオシャレをしています。

次は、下の妹のことをいいます。妹は二才です。いつも家で変なことをしています。わたしのつくえにえん筆でラクガキをしてきます。じゃまをしてくる時もあります。

六人家族なのでいつもさわがしいです。お父さんとお母さんも大いそがしです。だから、たまにお手伝いをしてあげたいと思います。

お母さん、いつもありがとう

三輪崎小学校四年

お母さん、わたしを産んでくれて、ありがとう。
わたしに、名前をつけてくれて、ありがとう。
赤ちゃんの時、体をあらってくれて、ありがとう。
朝、起こしてくれて、ありがとう。
お料理をしてくれて、ありがとう。
せんたくものや洗いもの、朝の準備をしてくれて、ありがとう。
自転車の乗り方を教えてくれて、ありがとう。
自転車で、こけそうになった時、
「がんばれ。」
って言ってくれて、ありがとう。
「前をまっすぐ見て、こいでね。」
って教えてくれて、ありがとう。
家族のためにがんばってくれて、ありがとう。
いっぱい心配してくれて、ありがとう。
お母さん、お父さんとけっこんしてくれて、ありがとう。
これからは、お手伝いがんばるよ。
お母さんに、
「ありがとう」
って言ってもらえるように、がんばるね。

兄とぼく

高田小学校四年

ぼくには、やさしい兄がいます。兄は、ぼくが小さい時からかわいがってくれていたそうです。兄とは、たくさんの思い出があります。

ぼくは、鉄ぼうが好きでした。だから、保育所で、いつもがんばって練習をしていました。ぼくが四才の時、学校に遊びに行きました。その時に一番高い鉄ぼうができて、兄がすごくほめてくれました。

ぼくが入学して一年生になったときには、ぼくに勉強を教えてくれました。そのおかげで色々できるようになって、かけ算を全部おぼえました。

ぼくが二年生の時には、兄がミニカーにはまっていて、いつも

遊んでいました。ある日ぼくが、
「ミニカーかして。」
と言ったら、兄はかっこいい車を貸してくれました。遊んでいたら、その車をこわしてしまいました。ぼくは、兄の大切な物をこわしてしまったのです。でも兄は、
「別にいいよ。こっちの車を貸してあげる。」
と言って、もう一つの車を貸してくれました。
ぼくは、こんな兄の弟に生まれてよかったと思いました。
その次の日には、ぼくは友達のことを考えていました。前に引っこしていった、なかよし四人の二人のことを思っていたら、少しさみしくなって、ため息をついていました。すると兄が、
「どうしたの。」
と声をかけてくれました。ぼくが理由を言うと、
「二人は引っこしたけど、兄ちゃんがおるからだいじょうぶやよ。」
と言ってなぐさめてくれました。
ぼくが三年生になると、兄は少しきびしくなりましたが、一緒にゲームをしたり、勉強をしたりと、今までと変わらずになかよくしていました。
今、ぼくは四年生で兄は中学一年です。三才ちがいだけど、とてもなかよくすごしています。
ぼくは、こんなにもやさしくて、色々教えてくれる兄が大好きです。

ありがとう

神倉小学校五年

みなさんは、人に感謝されたことはありますか。ぼくは人に親切にして感謝されると、心が温まると思っています。「人に親切にすると自分も相手も心が温まる」そういう思いで、人に接するのはとてもいいことだと思います。ある時、みんなが先に帰ってしまい、一人で帰っていると、外国の観光客が道にまよっていました。
「どうしましたか。」
ときくと、日本語になれていないらしく写真を出して、
「ここに行くにはどうすればいいですか。」
ときかれました。そこがぐうぜん近いところだったので、道を教えてあげると
「ありがとう。」
と笑顔で言ってくれました。ぼくは自然と心が温まりました。その日は、なんでもうまくいくような気がしました。家に帰ってお母さんにその出来事を伝えると、
「そう、それはよかったね。」
と言ってくれました。お母さんもそう言ってくれたので、とてもうれしくなりました。もしあの時、道案内をしていなかったら、ぼくは人に感謝されるうれしさに気づかないままだったと思います。あの道に迷っていた観光客は、ぼくに「感謝されたうれしさ」「人にいいことをして心が温まる気持ち」を教えたくれた人なんだと思いました。
みなさんにもそんな気持ちを教えてくれる人がいるかもしれま

せん。「人に親切にすると相手も自分も気持ちのいい心になる」ぼくはこう思っています。例えば、人に親切に話しかけると相手はうれしい気持ちになります。人にきつい言葉で話しかけると相手は不機嫌になります。言葉は力を持っているので、相手をおこらせるようなことを言わずに親切にするとお互いにうれしくなります。

人に親切にすることで、自分だけでなく、友だちや周りの人も幸せになります。親切にする人が増えることで、みんながすごしやすい社会になっていくと思います。

もっともっと

三輪崎小学校五年

私は、今年「大切な人」を亡くしました。その人は、私の大好きな人です。

私が産まれた時からずっとそばにいてくれました。亡くなった時は、本当に急でした。亡くなる二日前、私といっしょに出かけてくれました。その三日後、まだ夏休みで、私は宿題をしていました。

すると、とつぜん電話がかかってきました。母が電話に出るとおどろいた様子で話をして、電話を切りました。その電話は私の、「大切な人」が亡くなったという知らせでした。その話を母から聞いたしゅん間、私はなみだがあふれてきました。けんかをしたこと、笑い合ったこと、今までの全ての思い出が頭の中をかけめぐりました。そして、信じられない気持ちでいっぱいになりました。

その後、「大切な人」に会いに行くと、私はショックが大きすぎて、少ししか顔を見られませんでした。こうなる前に何かできることがなかったのか後悔しました。私はとても辛くて、ご飯も食べられませんでした。私もいっしょに天国に行きたいと思うほどでした。

けれど、辛くて、悲しいのに元気づけてくれたのは、家族でした。いっしょうけんめい私に優しい声をかけてくれました。他にも私を元気づけてくれたのは、亡くなった「大切な人」との思い出でした。

以前、私は辛いことがあると、よくその人に相談していました。辛い出来事を話すと、その人は、

「大丈夫、愛鈴は強いから、その辛さを乗りこえれば、もっともっと強くなれるから。」

と言ってくれたことを思い出しました。もしその人が、こんな私を見たら、きっと同じことを言うだろうと思って、前を向くことができました。

この出来事を通して、私は、当たり前だと思っていたことが当たり前じゃないということが分かりました。だから私は、一日一日を大切に生きたいし、友達や家族、支えてくれている人、いっしょにいてくれる人との時間を大切にしていきたいと思いました。

今もまだ、ふとした時に思い出して辛くなることもあるけど、乗りこえて、私はもっともっと強くなります。

もっといい高田へ

高田小学校五年

ぼくは、高田のいい所について考えてみました。

ぼくたちの住んでいる高田は、とても楽しくて、いいところがたくさんあります。

例えば、高田小学校だからこそできる、田んぼの田植え、草ぬき、いねかりがあります。ほかにも、高田だからこそ小中学校全員と友達だったり、小学校と中学校で校舎が分かれるけど、みんな知り合いで、楽しく全員で話しながら、全校でごはんを食べることができます。

このことを考えるきっかけは、国語の学習で、「よりよいくらしのために、自分たちにできること」として、提案書作りをしたことです。そのときにぼくは、住んでいる高田について、まとめました。

地いきの方たちと交流できることもいいところの一つですが、初めに書いたように、小学生と中学生が、いつもとなりどうしで会えたり、遊んだり行事をいっしょにしたりできるのが楽しいからです。

例えば、昼休みに、小中学生で遊ぶ時間があります。わたりろうかを使って、さそいに行って、いっしょに遊びます。そんな時には、低学年の子たちにも声をかけて、いっしょに行きます。人数が多いと楽しいし、さそってあげると、とてもうれしそうにしてくれるからです。

そして、登下校や給食当番、そうじなどは、下級生のみんなといっしょにしています。いっしょにいるときは、楽しい話をしたり、遊ぶやくそくをしたり、仕事のやり方なども教えたりしてあげます。特に、当番やそうじが困らないように、下級生にやさしくおしえます。

中学生のみんなとは、児童会で、学習発表会のスローガン作りをいっしょにしました。

中学生といっしょに活動していると、いいアイデアを出してくれたり、声をかけてくれたりしてくれます。

「あとは、やっておくよ。」

と言われると、すごいな、たのもしいな、と思います。

ぼくは今、五年生だけれど、そんなたのもしい中学生になりたいと思います。

ぼくの通っている高田小中学校の人数は少ないけれど、たくさんいいところを発見することができました。クラスのみんなは、とてもやさしいので、仕事を手伝ってくれたり、ぼくといっしょにがんばってくれたりします。ぼくは、いつも、心の中で、ありがとう、と言っています。小中学校のみんなと過ごすと、いつもとても楽しいです。

こんな気持ちで、みんなと過ごせれば、ますます高田小中学校が、いい学校になると思います。

ぼくは、来年六年生になるので、今の六年生や、中学生のみんなを見習ってがんばりたいです。そして、もっともっといい高田になるといいな、と思います。

あいさつの大切さ

王子ヶ浜小学校六年

みなさんは、あいさつをしていますか。あいさつは、すごく大切で、人と人とが気持ちよく生活をするための礼儀だと私は思っています。

私は、五年生の時に、児童会であいさつ運動をしていたことがあります。朝八時から八時二十分まで、雨の日や寒い冬の日でも、あいさつ運動をしていました。大きな声であいさつをしてくれたり、笑顔であいさつをしてくれたりする人がいると、私もすごく気持ち良かったです。ですが中には、

「おはようございます。」

と言っても、あいさつを返してくれない人がいました。そんな人がいると、あいさつをしていた私も気持ち良くはありませんでした。

あいさつは、人と人とが関わり合うための大切なコミュニケーションだと思います。そして、あいさつをすると、した人もされた人も心が温かくなるような気がしますよね。

例えば朝、大きな声であいさつをして、相手がそれを返してくれたら、その日一日が明るくなった。という経験をした事がある人も多いのではないでしょうか。あいさつをした両方の人の心が温もり笑顔がうまれます。あいさつは、生活には欠かせない大切なものだと思います。私がそう思うのには、二つの理由があります。

一つ目は、あいさつをすることは、自分の心を開き相手を認め、受け入れる事なので、良い印象をもたれることがあります。

そのため、あいさつを気持ち良くしている人は、話しかけやすい雰囲気がありますよね。なので、友達がたくさんいるのではないでしょうか。

二つ目は、あいさつをすることによって、お互いの存在を認め合っていることになるからです。

私は、今まであいさつをしてくれなかった人があいさつをしてくれるようになった時や「あまり仲良くないかな。」と思っていた友達にあいさつを返してもらった時に、自分の存在が認められたようでうれしかったです。みなさんも、自分があいさつをしたのに、それを返してくれなかったら無視をされているみたいであまり気持ち良くはありませんよね。

このように、あいさつは、人と人とが関わり、生活していくための一番最初の大切なコミュニケーションなのです。あいさつをするだけで心が温かく、笑顔になります。

みなさんも、人と仲良くなるための第一歩だと思って、自分から出来る人も、出来ない人もまずは、あいさつを返すからでも良いので、気軽にあいさつをしていってほしいです。私も、心のこもったあいさつをしていきたいです。そして、それを見た周りの人が一人でも多くあいさつの出来る人になってくれたらうれしいです。

勇気をもって

熊野川小学校六年

自分と同じぐらいの子が、暴力や暴言などのとてもいんしつないじめを受けて自殺してしまうニュースや時には大人でも、いじめを受けて自殺したニュースをテレビで最近よく見かけます。そ

のたびに、私は、いじめは誰の身でも起こるのだと感じました。
そして、いじめに関するニュースを通して、いじめには、被害者と加害者だけでなく傍観者という存在がいることを知りました。傍観者とは、いじめを見て見ぬふりをしている人のことです。
見て見ぬふりをすることも、いじめをすることと同じなのではないのでしょうか。いじめを止める機会はだれにでもあります。しかし、見て見ぬふりをすることで、いじめを止めるきっかけが失われてしまいます。いつまでもいじめを見て見ぬふりをする傍観者がいるから、いじめは減らないのではないかと考えるようになりました。
でも、どうすれば傍観者を減らし、いじめを減らすことができるのでしょうか。
いじめを直接止めることは簡単ではありません。確かに「いじめを注意すれば自分もいじめられる。」「そんなことこわくて言えない。」と感じる人もいるでしょう。
「一緒に〇〇ちゃんのことといじめようよ。」
と言われたら、あなたならどうしますか。周りに流されていじめに関わってはいけません。「親友だから。」「きらわれるから。」という気持ちが心の中には、きっとあります。しかし、いじめられている子のためにも、そして、自分が大人になって、「いじめをやめさせればよかった。」と後悔せず生きていくためにも、
「そんなことは、してはいけないよ。」
と勇気を持って言うことで、いじめの状況を大きく変えることができると思います。
その一言がどうしても言えなくても、いじめのことについて先生や家の人など親しい人にいじめがあることを伝えるなど行動に移すことが大切だと思います。
傍観者がいじめを止める人に変われば、いじめは間違いなく減ると思います。
人をいじめるという行いは、やってはいけません。そして、見て見ぬふりをすることや加害者と同じになっていじめることもやってはいけません。いじめを止めることは誰だってできます。いじめを見かけたら言ってみませんか、「やめなよ。」と。

三つの約束

三輪崎小学校六年

私は、とても大好きなおじいちゃんがいます。しかし、身内ではなく、近所の人なので血のつながりはありません。でも、おじいちゃんは、そんなこと関係なしに、本当の孫のように接してくれました。私は、おじいちゃんが家に来ることが楽しみで楽しみで、たまりませんでした。
おじいちゃんは、いつもニコニコしていて笑顔を絶やさない人でした。その笑顔で元気になる人がたくさんいて、おじいちゃんの周りはいつもにぎやかでした。私はそんなおじいちゃんにあこがれていました。
また、昔、学校の先生をしていたので学校の宿題の分からないところや、漢字を教えてもらいました。難しい漢字を教えてもらったおかげで、難しい本が読めるようになりました。
おじいちゃんがいる日々はとても楽しかったし、私は本当に幸せでした。
去年の今頃、夢を見ました。その夢は月に何度か見ました。この夢の内容は、おじいちゃんがいるのですが、最初は笑顔で近く

にいるのに、日に日に笑顔が消えていき、だんだん遠ざかっていく夢です。私は、この夢を見て目が覚めるといつも汗びっしょりで、泣いています。私は何か嫌な予感がしてきました。ちょうどその頃からおじいちゃんの体調が悪くなりました。でもおじいちゃんは、会議があるから、面会があるから、などとスケジュールの問題で病院に行きませんでした。そのせいか、体調はさらに悪化し、ついには家でこもったきりになりました。私は辛くて辛くて病院に行くよう、泣きながら説得し、病院に行ってもらいました。すると、すぐに入院することになりました。病院に何度もお見舞いに行ったのに、体調が優れなかったので、家族しか面会できませんでした。私の中でおじいちゃんは、家族だったので、ちょっと悲しくなりました。

この夜、また夢を見ました。この夢は、今までの夢とは違って、おじいちゃんと三つの約束をする夢でした。その約束の内容は、

一つ「辛くなっても泣かないこと。」

二つ「周りの人も自分も笑っていること。」

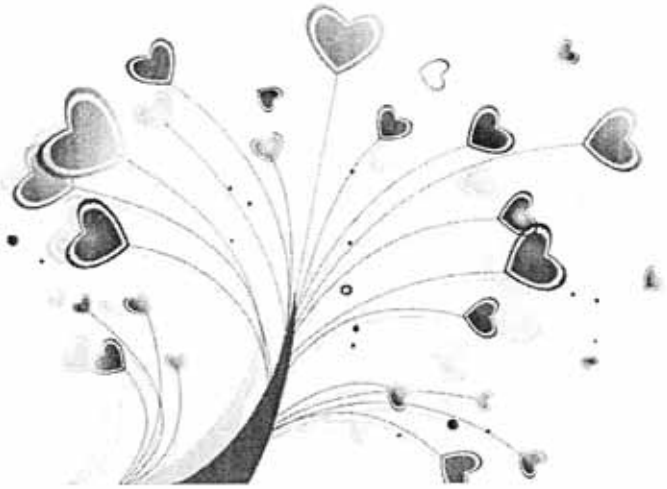
三つ「命を大切にすること。」

です。約束をした後おじいちゃんは消えていて、私は白い空間に一人でいました。

この夢を見て一週間後、おじいちゃんは亡くなりました。おじいちゃんの青白い顔を見て、私は大泣きしてしまいました。「泣かない」と約束していたのに辛くて耐えられませんでした。おじいちゃんが亡くなってから一ヵ月弱くらいは、毎晩のように泣きました。

でも、もう約束したので泣きません。

この約束は、私が楽しく暮らすための約束だと思い、守っていきたいです。そして、おじいちゃんのように、笑顔を絶やさず、誰にでも優しくできる人になりたいです。



中学生の部

向き合う

高田中学校一年

今年の夏、私はボランティアスクールに行きました。私が参加したのは、市内の中高生が保育園や障がい者支援施設などで三日間体験をし、最終日には講演やグループ学習が行なわれる、計四日のプログラムです。

私が訪ねたのは、知的障がい者の生活支援を行なう施設です。ここでは、たくさんの利用者さんが職員の支援を受けながら、日常生活を送っています。私達参加者も、職員さんと掃除をしたり、利用者さんとお話をしたりしました。

この施設での三日間の体験を通じて、私の中にあった、障がいをもっている人へのイメージは大きく変わりました。

施設に行く前、私の中には、障がい者、しかも知的障がい者と聞くと、会話ができない、話の内容が分からないなど、意思疎通が難しいというイメージがありました。しかし、その施設に住んでいらっしゃる方々は、比較的会話がしやすく、話の中で笑顔も見られました。障がいの度合いによるのかもしれませんが、少なくとも「障がい者＝会話が難しい」というのは、単なる私の固定観念だったのです。

この、固定観念というフィルターは、何に対しても、また誰もが持っているものだと思います。

例えば、カレーの写真を見せて、「このカレーはどんな味ですか」と聞かれたら、ほとんどの人が辛いと答えるでしょう。甘いや苦い、ましてや酸っぱいなどと答える人はいないでしょう。これは、カレーに対するイメージ、言い換えれば固定観念です。カレーといえば「辛い」という私達の固定観念がそうさせているのです。

では、こんな場合はどうでしょう。「A子さんは髪も染めて、アクセサリーもつけているから悪い子だ。」これは先ほどのカレーの例とは少し違います。先ほどの例では、今までに食べたカレーが辛かったので、辛いと答える人がほとんどですが、この場合は、見た目だけでA子さんの性格まで判断しています。

もちろん、学校に髪を染めてきたり、アクセサリーをつけて来たりするのは良いとはいえませんが、見た目だけでその人の中身や性格まで判断するのは、すごくもったいないことだと思います。なぜなら、見た目だけでは分からない、優しさや面白さなど、その人の本当の魅力に気づくことができないからです。それってすごく残念なことだと思いませんか。

私は、更にこの固定観念というフィルターが度を過ぎると差別につながるのでは、と考えています。相手とちゃんと向き合わずに、「この人はきっとこうだろう」という自己完結で終わってしまうと、相手のことをよく理解しないまま避けたり、排除したりすることにつながり、差別のもとを生み出すと思うからです。

もしも、世界中の人が固定観念を捨てて物事を見られるようになったら、見た目や障がいや宗教など様々なちがいを超えて、一人ひとりと向き合うことができると思います。そうしたらきっと、差別や偏見もなくなって、皆が自分らしく生きることができるはずです。そんな未来が来ることを、私は信じています。

家族がいる幸せ

光洋中学校一年

ぼくは、世界中には、様々な理由で両親がいない子どもたちがいることを最近テレビで知りました。なぜ親がいないのか、不思議になりテレビを見ていると、おどろきました。戦争や事故、ここまでは仕方無いと思っていたのですが、親に捨てられた子ども、売られた子どもがいることにおどろきました。

ぼくは、「産んだのなら最後まで責任を持って育てろ。」と思いました。ですが、子を捨てた親にも何かしらの事情があったのかもしれません。例えば、子育てできるほどの金銭的な余裕が無い。子を売ってでもお金が要る、などが捨てたり売ったりする理由に挙げられます。でもぼくが「これは、ひどいな。」と思ったのが育てる気もなく産んで捨てるか売る人です。売られた子がどうなるかは、分かりませんが捨てられた子は、運が良ければ保護されますが最悪の場合そのままのたれ死んでしまう子どももいるのです。なぜこんなにもかるがるしく命を捨てれるのでしょうか。

ぼくは、思いました。なぜ罪もない子どもたちが死ななければいけないのでしょうか。ぼくはちゃんと育ててくれる親のもとに産まれて本当に良かったと思います。皆さんは、考えたことがありますか。もしかしたら捨てられていたかもしれない、もしかしたら売られていたかも知れない。そう考えると日本は、すごく豊かな国だと思いました。

ぼくには、家族がいます。きっと皆さんにもいると思います。この平凡な日常が何よりも素敵で何よりも幸せなのです。捨てられた子や売られた子は、それが日常ではないのです。保護された子たちは、養子として親がいるかもしれません。ですが保護されなかった子たちは、あくる日もあくる日もまだこない親と死を待つのみです。

ぼくは、何かこの子たちのために何かできないかと考えました。そして思いついたのが募金でした。そう募金することでそのお金がそんな親たちに寄付されます。そして、金銭的な余裕がうまれ子どもを捨てる人や売る人がなくなります。だからぼくはこれからは、積極的に募金しようと思います。募金は、コンビニでできますからおかしを買いに行っておつりなどを募金していきたいと思います。

まあ、ぼくはやっぱり家族と一緒にいることが一番の幸せではないかと思いました。

当たり前の日常

緑丘中学校一年

「当たり前」とは、どういうことなのだろうか。「常識的なこと」なのか、「日常的なこと」なのか。それとも、これとは別のことなのか。今現在、私は何が本当の正しい当たり前なのかをまだ導き出せていない。でも、一つ言えることは、「自分の思っている当たり前と他人の思っている当たり前は必ずしも同じではない」ということ。私がこの結論に至ったのはある二つの出来事があったからである。

一つ目は「ユニセフのCM」だ。私たちは毎日学校に行って勉強して、友達と遊んで、美味しいご飯を食べる…。これが私の思っ

ていた当たり前だった。しかし、そのＣＭを見た時、そんな考えは一瞬にして消え去った。世界には勉強も食事も満足に出来ない子ども達がいることを知った。それと同時に、私の何気ない日常が「当たり前」なのではなく、「幸せ」だったのだと。

二つ目は「部活動」である。私は中学校に入学し、部活動を始めた。しかし、六月中旬、突然、左足の痛みに襲われた。原因は、足の骨が一本多いことによる炎症だった。この時、「部活動が出来ること」がどれだけ幸せなのか。身をもって知った。

この二つの出来事は私に大切なことを教えてくれた。私たちの日常は当たり前ではないということ。そしてそれは「幸せ」だということ。それなのに、どうして「いじめ」や「差別」をするのだろうか。何故、幸せな世界を壊そうとするのだろうか。それはきっと、自分の思っている当たり前を基準にして考えてしまっているからだろう。

人は誰しも、自分を基準にして考え、物事を進めがちである。しかし、人は一人では生きていけない。人は互いに支え合って生きているのだ。だからこそ、自分の思っている当たり前を他人に押しつけてはならない。まずは、この幸せな日常に感謝すること。私はこれが世界中の人々が幸せな日常を送れるようにするための第一歩ではないかと考える。

「差別」

熊野川中学校一年

「障がい」と聞いて、どんなことを想像するだろうか。きっと多くの人が「自分とは違う」と思っていると思う。でも、そういう人たちも自分たちと同じように生きている。同じような喜びを感じ、苦労もたくさんしている。でも、なぜ人は、「差別」をしてしまうのか。小学生の時、中学生との運動会で障がいを持っている人たちと交流しているのを見て、一番初めに思い浮かんだことは「かわいそう」だった。誰もそういうことは口に出そうとはしなかったが、同級生のみんなも同じ事をその時思っていたと思う。

私はそんな思いを持ったまま中学生になった。先生から、障がいを持った方と交流すると言われ、最初はとくに何も思わなくて楽しみだったけど、その日が近づいてくる度にどんどん不安になっていった。私の近所にも障がいを持っている人がいるが、私はいつも楽しそうに話す母の後ろに立っていた。私には、なぜそんなに楽しそうに話せるのかが分からなかった。やがて、交流の日が来て、私たちは障がいを持った方（利用者さん）の前に立った。急に大声を出す人、急に立ち出したりする人、いろいろな人たちがいて、その時の私は、「怖い」という気持ちだけだった。

最初にホットケーキを作った。そこで利用者さんと一緒にひっくり返す作業があった。まだ一言も話していない人とこういった作業をすることは、人見知りでもある私にとってはすごく難しいことだった。順番が回ってきて、私は利用者さんとフライ返しを持った。この時、手が震えていたことを覚えている。出来上がって、私は利用者さんと一緒に座った。私が黙っていると、利用者さんから話しかけてきた。それは、変わった話ではなく、私たちが普段話していることと変わらなかった。どんどん話をしていくうちに緊張もなくなり、私から話しかけることもあった。手を繋いで踊ったり、輪になって歌ったり。その時の私には「不安」なんて何もなかった。「怖い」と思っていた自分が恥ずかしく思え

るぐらい楽しかった。私たちの歌も最後まで真剣に聴いてくれて、お別れの時も最後まで私たちを見送ってくれた。また一緒に話したいと思った。

この日のことがあってから、私は近所の障がいを持った方たちともよくしゃべるようになった。あいさつだけではなく、その場で話をするようになった。私は今まで障がいを持った人は「自分とは違う」と勝手に決めつけたりして、そういった人たちを避けてきた。

でも、今では逆に自分から話しかけるようになった。そして、学校の友達と同じように一緒に笑ったり、色々なことを教えてもらったりして、とても楽しい時間を過ごしている。

「ひめゆり」が教えてくれたこと

高田中学校一年

「なぜ戦争をするのだろう。」僕は沖縄での修学旅行で、そのことについて考えた。

九月の終わり、修学旅行で初めて訪れた沖縄は暖かく、海で泳ぐ人もいるくらいだった。

国際通りやアブチラガマ、米軍基地など様々な場所を訪ねたが、それらの中で僕の心に一番残ったのは、「ひめゆり平和祈念資料館」だった。

ひめゆり資料館は、沖縄戦で、陸軍病院の看護活動に動員され、多くの犠牲者を出した、ひめゆり学徒隊に関する資料を展示し、戦争の悲惨さを伝えるための施設だ。

様々な展示物や映像の中には、第三外科壕を再現したものや、ここで実際に使われていた手術道具などもあった。病院とは言っても、暗い壕の中で設備もなく、道具もメスや灯り用の油缶などがあるだけで、手術は奥行きの浅い土間に設置された手術台で行われていたそうだ。しかも、麻酔を使わずに。

手術を手伝ったひめゆりの人たちは、切断された手足を見たり、触ったりすることがどんなに嫌でも「国のためだから」とやらされたのだろう。

第三外科壕で看護をしたひめゆり部隊の人たちは、最後、解散命令が出され、壕の外に出て行かなくてはならなかった。しかしそのほとんどが、集団自決をしたり、アメリカ兵に殺されたりしてしまい、当初二百人いたひめゆり部隊のうち、生き残ったのはたったの五人になってしまったのだ。

もしこの戦争がなければ、今の僕のように、楽器の演奏をしたり、友達と遊んだりできただろう。だけど、ひめゆりの人たちはそういう自由が許される状況ではなかった。戦争に巻き込まれ、悲しく、辛いことに、耐え続けなければならなかったのだ。このようなことを考えると、僕は戦争で得るものは何もないと思う。それならなぜ、戦争をしようとするのだろうか。

それは、国全体で見ると得るものがあるからだ。たとえば、B国がA国を攻めるとする。理由は、土地を得られる、財を得られることなどだろう。逆にA国は、勝てば国を守ることができ、今後B国を攻撃しやすくなるかも知れない。このように、どちらも国全体で見れば、得るものがある。しかし、よく考えると、その戦争の陰では、ひめゆり部隊のようにたくさんの人たちが犠牲になっている。つまり、一人ひとりの命や、自由な生き方を無視して、誰かが国の利益を優先したとき、戦争が起きてしまうのだ。

そんな戦争をなくすことはできるのだろうか。僕は初め、戦争

をなくすには、全ての国が単に仲良くなればいいと考えた。しかしそれぞれの国は考え方も文化も違うので、それはとても難しいことだ。だが、全ての人が、武力の代わりに頭を使って自国の考えをうまく伝えることができれば、戦争で問題を解決しようとすることがなくなるのではないだろうか。

そんな世界をつくるために今、僕は、まず自分の意見を言い、そして相手の意見を理解しようとすることや、他の国のことについて知ろうとすることが大切だと思っている。

お互いの良さを認め合えるように

近畿大学附属新宮中学校二年

ある日、ユーチューブを見ていると、韓国の人が、自分の車を鉄パイプで壊している動画を目にした。自分の車が日本製だったので、日本製の車を運転することに恥ずかしさを感じて、破壊したそうだ。

それを見て僕は、なぜ日本製の車に乗ることが恥ずかしいのだろうと思い、調べてみた。今、韓国では日本製品不買運動が広がっているようで、その背景には、日本の経済報復への抗議とインターネットに書いてあった。僕は経済報復が何かわからなかったので、さらに調べてみた。日本政府による韓国向け輸出規制を強化したことに、韓国側が反発したとあった。日本やアメリカ、韓国や中国などそれぞれの国は、自分の国の利益のため、様々な外交をしている。

だが、今回調べていくうちに、反日感情というものがあることを知った。日本と韓国の間には、豊臣秀吉の朝鮮侵略から始まって、日本の植民地支配、慰安婦問題、竹島問題など、第二次世界大戦がおわるまでに起こった歴史的問題が根本にあり、両国間で認識に隔たりがあり、今に至るまで日本が謝罪や賠償を行ってきても、一部の韓国の人の間では、今もなお許されない問題とかんじているようだ。

一方で、日本においてもヘイトスピーチが問題になっていると お父さんが教えてくれ、パンフレット「私たちの身近にあるヘイトスピーチ」「差別のない社会をめざして」を見せてくれた。一部の韓国の人が日本との歴史的問題を今もなお許さないように、日本においても一部の人により、特定の国や地域の出身者やその子孫を日本の地域社会から排除することをあおり立てる差別的言動が起こっているそうだ。戦争や争いなどの歴史的経緯が根本にあるのかもしれないが、その一部のわだかまりにより、その国・その国の人全てを憎むのは悲しいことである。

僕が住んでいる那智勝浦町には、海外からたくさんの外国人観光客が来てくれている。僕の家の前も、世界遺産の熊野古道を歩く多くの外国人がいる。僕の大好きなふるさとを、外国の人が興味を持って、旅行で訪れてくれることはとてもうれしい。世界には、様々な宗教や文化、習慣の違いがある。その違いを排除するのではなく、お互いの良さに目を向け、認めるあえるようになればいいなと僕はおもう。

高齢者について

光洋中学校二年

僕には、父方と母方のひいおじいちゃんとひいおばあちゃんがいます。特に母の方は、小さい時から近くに住んでいて、僕たちの面倒を見てくれていました。二人とも八十歳後半で、最近は、とても歳をとったなあと実感しています。

ひいおじいちゃんは、目が悪いので、もう車の運転はしていません。でも、ひいおばあちゃんは、車で買い物に行ったりしています。

最近テレビでは、高齢者の自動車事故のニュースがよく報道されています。僕の周りでもひいおばあちゃんが運転するのを、とても心配しているようですが、ひいおばあちゃんは「車がなかったら、とても不便で仕方がない」と言います。

都会では、交通手段が発達しているので、車がなくても移動はできますが、新宮市のような田舎では、電車もバスも便数が少ないため、高齢者は、車がなかったらふだんの買い物にも不便な思いをしています。

最近では、Aコープの「とくし丸」のように、小さな車に商品を積んで、お店が少ないところなどに行っているようです。きっと高齢者の人たちには、喜ばれていると思います。こんなサービスがもっと増えたらいいなと思います。

また、歳をとったら病院に行くことも増えるので、バスの便数を増やしたり、タクシーをもっと安く利用できるサービスなどがあれば、便利です。

歳をとれば、身体のいろいろなところが悪くなったりします。たとえば、耳も遠くなり、災害などの放送も聞き取りにくいと言います。串本の方では、各家庭に、防災行政無線が取り付けられています。それだと、家の中でも放送がきちんと聞こえます。

目が悪いと、ちょっとした段差が見えにくかったりして、ころんでけがをすることもあります。

こうした高齢者の人たちが困っていることを。僕たち一人ひとりが気づかなくてはいけないと思います。

自分の周りの高齢者に、なにがこまっているかを尋ねることもそのひとつだと思います。

僕はまだ中学生なので、たいしたことはできませんが、できる範囲のことで、手助けできたらと思います。

市役所などでしてほしいことは、大人に伝えられるようにしたいです。高齢者が住みやすい町は、だれもが住みやすい環境なのだと思います。

戦争を体験しなかった私たち

城南中学校二年

平和な時代に、私たちは生まれた。

それはとても実感できる。朝、起きて家族と一緒に朝食を食べ、学校に行き授業をうける。友達と話題のアーティストの話をして、一緒に楽しい時間を過ごす。家に帰れば家族がむかえてくれた。「おかえり」も「ただいま」も、もう何百回も言った。特にトラブルのない一日を過ごすたびに平和だなあと思う。

けれど、私たちの時代とは真逆に、毎日を必死に生きなければ

ならない時代もあったのだろうか。母に、子どもの頃の話を聞いたが、今の私とあまり違わない子どもだったと言った。私が戦争の悲惨な出来事を知ったのは、たしか小学校五年生ぐらいのときだった。

そのとき、私のクラスでは、歴史漫画が学級文庫に置かれていた。興味をもって、歴史漫画を時代別に読み進めていくと、私はある本を見つけた。その本は戦争中に起こった出来事がまとめられ、リアルに描かれていた。今の時代に生きている私にとって、描かれた内容は目を疑うものだった。世界中を巻き込む戦争の渦の中に日本は足を踏み入れ、その中で多くの犠牲者がでても、抜け出そうとせず、国中をまきこんでいった。

最も印象に残ったのは、八月六日に広島へ投下された原爆によってできたキノコ雲だった。巨大な熱と光とともに広島が一瞬で破壊された瞬間の写真を見ると、その時の光景が頭の中に思い浮かんだ。空から十万人以上の命を奪う爆弾が降ってくるなんて思っても見ないことだ。日本が戦争の道を進んだ結果だったと、私は思った。

恐ろしいのは、原爆が投下された後も、犠牲者がでていたこと。放射線を浴びた広島の人々は、その後遺症に苦しんでいた。

もし、この怖い出来事が、私たちが生きている時代で起こったら、どうなるのだろう。いつも通りの日々が一瞬で壊されてしまったら、私は、どう生きていけばいいのだろうかが分からなくなると思う。家族も、帰る家も失った私と同じ歳の子どもが、その本には描かれていた。「おかえり」と笑顔で迎えてくれる家族がいる私とは真逆の姿だった。

戦争が終わったころには、日本は焼け野原になっていた。犠牲になった人たちは戻ってくるわけもなく、心に傷を負った多くの人たちの回復を待つばかり。

しかし、その後の日本は、苦労をしながらも、必死に今の平和な時代へと歩み始めた。これは、戦争の道を進んでいたころとは、まったく違うことなのに、なぜ、こんなにも平和な時代を創ることができたのだろう。今なお、私たちの平和な時代に、あらゆる形で戦争という悲劇は伝えられている。原爆ドームも、そのときのままとり壊されることなく、今も広島にある。何故とり壊さないのか、と思った人もいただろう。確かに、原爆の恐ろしさを思い出してしまう人もいたはずだ。それでも原爆ドームがなくならなかったのは、決して忘れてはいけないものだと、次の世代の人に伝えるためだと、私は思った。また、戦争の道を歩んでしまわないように平和な時代をつくっていくために、この場所を残した。そんなメッセージを今の私たちに伝承していきたかったのかもしれない。

戦争を知らない私たちの時代にも、戦争で起こった悲劇が伝えられている意味が、私は分かったかもしれない。いつも通りの日常、いつも通りの日々が私たちの次の時代でも続くように。今の平和の日々がずっと続くように。そのためには私たちも先人から受け継いだ思いを、大切にしていかないといけない。自分がこの平和な日々を守っていくのだと改めて感じた。

私たちにできること

近畿大学附属新宮中学校二年

私は、「世界の果ての通学路」というテレビのドキュメンタリー番組を見たことがあります。私はそれを見て、自分たちの環境が

とても恵まれていることを改めて感じました。

「世界の果ての通学路」では、フィリピン、ペルー、ルーマニアに住む三人の子どもの生活のようすが描かれています。毎日、ゴミ捨て場にあったアクセサリーで使えそうなものを売りながら登校する姉妹。放牧生活をしながら、二時間半かけて学校に通う男の子。

通学途中にヤギと遭遇する、足場の悪い道を歩いて通学する女の子、日本の生活とかけ離れていて、考えさせられるものばかりでした。

今までも、親に発展途上国の子どもの生活について色々と教えられていたけど、「学校」という身近なものを通してみることで、少しだけ味方が変わりました。また、映像で見ることによって、生活のようすがよく分かりました。

私たちが捨てたゴミを家計の足しにしている人がいることに私は驚きました。私たちとってはゴミでも生活を支えるものになっているという差に、少し悲しくなりました。自分より年下の子がそこまで頑張らないといけないという状況が少しでもよくなればいいなと思いました。

私はそんな環境で生活している人に尊敬するところがたくさんありますが、特にすごいと思ったのはきちんとした夢を持っているところです。私は、小さな頃から、好きなことをいっぱいさせてもらっているけど、特に夢なんてないです。もし自分が貧困の家に生まれたら、未来のことを考える余裕なんてないと思います。

世界には、フェアトレードという活動があるそうです。フェアトレードは、発展途上国でつくられた製品を適正な価格で継続的に取引する貿易のしくみだそうです。私たちがフェアトレードの商品を買うことで、少しだけ力になれると思います。だから、私は、ものを買うときにしっかりチェックしてから買おうと思います。

今回、「世界の果ての通学路」を見て、自分たちが少しでも貧困の人を助けられる人になれたらいいなと思いました。そして、今の自分の環境に感謝して生きたいなと思いました。

そのために、まず、世界中で起きている戦争をすべてやめて、戦争に使うお金を貧困の人のために使うべきだと思います。それだけでも、命を救われる人は数え切れないほどいると思います。日本は戦争していなくても、同じ地球に住む人として、他人事と思わず、助け合えたらいいなと思いました。

食べ物をしっかりと食べられる、少しだけ余裕を持てるような人たちが少しずつでも増えていくように行動を起こせたらいいなと思います。人が平等に暮らせるような日がくる日まで、頑張りたいです。

「人それぞれの見方」

熊野川中学校二年

僕は今、手や足などを動かすことが出来ています。ですが、そういうことが出来ない人がいます。そういう人を見ると、自分が手足を動かす事が出来るのは幸せだという見方をします。

皆さんはどうでしょうか。手や足などが動かない人を見てどう思いますか。助けてあげたいと思う人がほとんどだと思います。しかし、そう思わない人もいます。そういう人たちに対して、可哀想という言葉や暴言などを吐く人たちがいます。そういう人たちは、その人たちに対してどういう見方をしているのかなと思い

ました。そういう人たちでも頑張って生活をしているというのに。

どうやったらこういう差別などをなくすことができるのかと考えてみました。一つ目は、そういう人たちの生活をしてみることです。相手の立場になって考えることで、考えを改めさせるということをしたら良いと思います。二つ目は、話を通じて直接訴えかけるということです。その人たちが直接訴えかけることで、その人たちもなりたくてなっているわけではないということを知って欲しいです。他にもまだあると思いますが、そういうことを行動に移すことで、今まで悪いことを言ってきた人も見方を考えてくれるのではないかと思います。

けれども、そういうことをしたとしても分からない人たちは、自分が年を取るごとに気持ちが分かるのではないかなと僕は思います。なので、日本にはこういう差別などはきちんとなくして欲しいです。そして、差別をなくし、共に助け合う心を持つ国になってほしいなと思います。日本がそういう対策がとれないのであれば、差別などがさらに起きていくんだなと思うと悲しいです。こういうことが起きないためにも、僕は誰に対しても優しく接したいと思います。

パラリンピック

城南中学校二年

私は四年に一度行われるオリンピック・パラリンピックにとても興味があります。なぜなら、この大会では選手の人たちが日々、オリンピックに出場するため、世界大会やさまざまな大会に出場して練習している姿を見ると、とてもひきつけられる思いになるからです。日本はリレーや水泳などでメダルをたくさん獲得しているところをテレビや新聞でよく見かけます。でも、その中で認知度が低い競技もあります。私はパラリンピックに興味があり、もっとたくさんの人に広がってほしいと感じました。学校にパラリンピックのポスターが貼ってあるのを見かけました。それを見て、初めて見た競技だったので「このような競技があるのか」と思いました。興味があるけど、まだまだ知らない競技があるのだと改めて感じました。それについて調べるためにテレビを見ていました。するとCMで「ボッチャ」といわれる競技があることを知りました。

その競技は色のついたボールを投げ、輪の中にいくつ自分のチームの色のボールが入っているのかを競うゲームでした。私は「ホッケーみたい」だと思いました。CMで小学生たちがそれを体験していて成功したときの映像などが映っていました。それを見て自分もとても楽しそうだと思いました。他にもユーチューブを見ていると、車イスバスケットボールを体験している動画がありました。私はバスケットボール部なので「どうやって車を押してボールを動かしているのだろう」と不思議に思い見てみると、車を早く進めボールをつきながらシュートを打っていました。その中ですごいと思ったのはレイアップシュートを決めていたことです。レイアップシュートは一歩、二歩、三歩目でシュートを打ちますが車イスでレイアップシュートを打っていたのはとても興味をひかれました。他に疑問に思ったことはディフェンスは車イスのディフェンスは車イス同士でぶつかって止めていました。それを見て自分はこんなに激しくぶつかっているのはとても危険だと思いました。車イスバスケットボールの方がもっと難しいと感じました。そして自分がもう一つ興味があるのは車イステニスです。私はテ

ニスは右に左に走って打たれたボールを素早く打ち返す技がとてもしんどそうに感じました。

その中で車イスでテニスをするというのはどれだけ疲れるものなのかが気になりました。以前、車イスの選手がテレビに出ていて見てみると、手で車イスを移動させて逆の方向に打たれたらその方向に車イスを走らせていました。車イスの両方の車輪を動かしラケットを持ったままボールを打ち返していました。その車イスは選手用に製造されているとしても、反射神経がすごいと思いました。車イス選手の人たちも日々うまくなるために練習を重ねていると思うと、自分たちももっと頑張ろうと思うし、もっとパラリンピックの認知度があがってほしいと感じました。

私は「障がいを持っている人」について作文を書くことがよくあります。なぜなら、もっとニュースなどでもパラリンピックの情報を流してほしいし、「障がいを持っている人がかわいそう」という声を聞くことがあるからです。自分も昔、そう思っていたけど、このような作文を書いていくと「それは自分の個性」だと感じることが多くなりました。こんな風にたくさんの人にオリンピック・パラリンピックを盛り上げてほしいし、差別などが世界から消えてほしいと思いました。

声をかける勇気

近畿大学附属新宮中学校二年

私は、以前高齢者疑似体験をしました。その時、目が見えにくくなるゴーグルをつけたりおもりや手袋をつけて、階段を上がったり下に落ちている物を取ったりしましたが、目が見えにくいから階段はつまづいてしまうしゃがんだりするのも大変でした。高齢者疑似体験をする前は、そんなに大変じゃないし今と変わらないだろうと思っていました。ですが、体験をして、お年寄りの人は、一つ一つのちょっとした動作、普段の何気ない生活が大変なんだなと思うようになりました。

私は、中学校に入って電車によく乗るようになりました。電車には障害を持っている人やお年寄りの人、怪我をしている人、妊婦さんなどが座るための優先席があります。私は電車にお年寄りの人などがいなかったら元気な人も優先席に座っても良いと思います。ですが、以前、男の人が何人か優先席に座っている所にお年寄りの人が乗ってきました。電車にはたくさんの人が乗っていてそのお年寄りの人は座る所が無く、とても困っていました。なのに、お年寄りの人を無視してその男の人達はずっと楽しそうに話して、座っていました。私は、それを見ていてとてもいやな気持になりました。男の人達は、お年寄りの人の普段の生活はとても大変だということを知らないんだなと思いました。

けれど別の日、とても親切な人もいました。お年寄りの人が降りる駅が分からずとても困っていました。その時、一人の高校生が立ち上がって笑顔で親切に細かく教えていました。また、日本語の分からない外国の人に一所懸命英語を使って、駅の名前や時間を教えている人もいて、教えてもらったお年寄りの人や外国の人はとても嬉しそうだったので、私も幸せな気持ちになりました。私もこんな風に親切な人になろうと思いました。

困っている人に

「席、どうぞ。」

と譲ることはとても勇気のいる事だけど、お年寄りの人や体調の悪い人、外国の人などが

「すみません、席変わってもらえますか。」
と言ったり
「道教えて頂けますか。」
と聞くのもとても勇気のいる事だと思います。今まで、私は座る席が無くて困っている人を見ても
「大丈夫ですか。」
と聞く勇気がなかったけれど、高齢者疑似体験をして、お年寄りの人がどれだけ大変なのかも分かったし、親切な人を見て私も嬉しい気持ちになれました。だから、よく周りを見て困っている人がいたら自分から声をかけて出来る限りの事はしたいと思います。
疑似体験をして思った事は、相手のことを思うこと、相手の立場に立って思うことでした。
声をかける勇気がない人もたくさんいると思います。そんな人も声をかける勇気をもって欲しいです。

みんなで生きていく

緑丘中学校二年

この世界には様々な人が存在し、生きています。生きている人の中には、みんなから愛され、幸せに生き、楽しく過ごしている人や努力して何かを成し遂げる人がたくさんいます。しかし、ひどい差別やいじめを受けて、自分の心に傷をおって過ごしている人だっています。その心の傷が癒えないまま自殺をする人だっています。では、そのような人たちをなくすためには、どのようにすればよいのか、自分なりに考えてみました。

一つ目は、個性を受け止めることが大切だと考えました。なぜなら、人にはそれぞれのその人にしか持っていない個性があるからです。見た目だけではなく、中身の個性を受け止めることで新たな発見ができるし、偏見をなくすことだってできると思います。誰もが個性を持った一人の人間であり、その個性を受け止めることが大切だと思います。
二つ目は、交流する機会を増やすことが大切だと考えました。なぜなら、交流することによって、自分が経験した辛いことや嫌なことなどを聞き、共感することで、少しでも傷が軽くなるのではないかと思ったからです。辛いことや嫌なことはあまり話したくないと思うけど、交流する場を設けることで、話すことができるかもしれないし、話すことによって自分の内に秘めていた重いものが軽くなると思います。それに、共感してくれる人がいることによって、もっともっと軽くなって、自分と同じような経験をしたんだという安心感みたいなものが生まれるかもしれません。
三つ目は、一緒に考え行動することが大切だと考えました。なぜなら、一緒に行動することによって、楽しかったり嬉しかったりして、笑顔が増えるかもしれないと思ったからです。笑顔が増えることによって、辛いことから離れることができるし、思い出が増えて毎日が楽しいと思えるようになり、もっと笑顔が増えるのではないかと思いました。
これら三つの「個性を受け止める」「交流する」「一緒に考え行動する」ことを大切にしていけば、心に傷のある人をなくせるかもしれません。傷が癒えなくても、心が軽くなって笑顔が増えていくと思います。この三つのことを実現させていきたいです。みんなで生きていくために。

私が望む世界

高田中学校三年

私は今年、歴史や公民の授業で人権について勉強しました。様々な人権問題がある中で、私の目にとまったのは、中長期在留者、日本に在留資格を持つ外国人の問題についてです。

平成三十年の時点で、日本の中長期在留者の数は二百六十三万七千二百十五人だそうです。これは日本の人口の約二%、つまり百人に二人が外国人だということです。そしてその割合は年々増えていて、これからも増えていくそうです。確かに思い返してみれば、街ですれ違う外国人の数が年々増えているように感じます。外国人の存在が当たり前になってきているのに、そんな外国人に対する差別があるというのです。

私は、中長期在留者の中でも特別在留者と呼ばれる在日韓国・朝鮮人（以下在日コリアン）の人権問題について興味を持ちました。在日コリアンは日本の植民地時代に渡日し、第二次世界大戦後、日本で生活基盤を築き、定住している人たち、「韓国籍」「朝鮮籍」「日本籍」を含む、朝鮮半島にルーツを持つ人たちを呼びます。

私は両親の友人に在日コリアンの人がいたこともあり、元々その存在は知っていました。しかし、在日コリアンに対する様々な差別があることを授業で初めて知りました。私の両親は外国で長い間住んでいたからか、差別的な考えを持たない人で、私もその両親の下で、人種への差別意識や偏見がないまま育ちました。だから日本の中で起こっている深刻な差別を知った時は目を疑い、「こんなにも愚かなことをする人々がいるのか。」と思いました。私にとってその差別というのは、まるで現実味がなく、昔話に出てくる弱い者いじめをしているオオカミとヤギのやりとりを読んでいるような感覚に陥りました。でも現実に起こっていることなのです。

具体的にどんな差別があるのか、本やインターネットで調べました。就職差別や入居差別があり、参政権が与えられていないこと、教育上でも在日コリアンの学校に公的助成はゼロなど、他にもたくさんあり、言い出せばきりが無いほどです。

また、男女差別やアイヌ民族への差別に対しては、「男女雇用機会均等法」や「アイヌ文化振興法」などの法律があるのに、長年差別を受けている在日コリアンに対する法律が作られていない、このことこそ、在日コリアン差別が強く根付いていることの表れではないかと私は思います。

差別をする人は、きっとひどい差別をされたことがないのだと思います。日本人を含むアジア人は、外国では差別の対象なので、同じアジア人に対する差別意識や偏見を持つ人たちも、一度日本から出て様々なことを経験したら、差別的な思考も多少変わるのではないでしょうか。

また、これら人種差別は、基本的人権の尊重や平和主義といった憲法の理念に反するのではないでしょうか。人種差別をなくすには、新しい何かを作るより、今ある憲法を日本に暮らす全ての人が守り、守られるような政策をすれば、日本全体の意識がもっと良い方向に向くと思います。特に、これからの社会をつくっていく私たち若い世代、中高生の意識改革が重要です。

私が今できることは、良い解決策を考え、自分から動けることには積極的に取り組み、身の回りから少しずつでも変えていくことです。

いつか大切な人ができたとき、その人が人種による差別や、不

当な扱いを受けるような社会は嫌です。本当は、差別する人もされる人も、そうでない人も、みんな誰かの大切な人です。皆がそれを理解し、全ての人が大切にされる世界を、私は望みます。

温かい家庭から笑顔一杯の社会に

光洋中学校三年

僕は最近のテレビのニュースの中で、「どうして？」疑問に思い、とても悲しい気持ちになることがあります。自分の子供を肉体的にも精神的にも虐待し、最後には死にまでおいつめてしまうというニュースは毎日のように聞こえてきます。僕には全く理解のできないことばかりで、現実にこんなにもひどい親がいると知り、少し調べてみました。

五才の女の子が父親から虐待され死亡した事件に、僕は体が震えました。言うことを聞かなければ、一日一食しか食事を与えてもらえず、顔や身体を殴るなど暴行され、衰弱したまま放置され死亡させられたのです。胸が張りさける思いで一杯になりました。この女の子は、約二年間にも虐待行為を受け続けました。母親は、自分の立場が危うくなるのを恐れ、夫に従い、虐待を見て見ぬふりをしたのです。父親も母親も最低です。僕はこの女の子が書いたノートを読んで涙が止まりませんでした。何度も「じぶんからもっともっときょうよりかあしたはできるようにするからもうおねがいゆるしてゆるしてくださいおねがいします」と書いていました。悪いのは両親なのに。毎朝四時頃一人で起床し、平仮名の練習も義務づけられていたそうです。きっとママにパパに認めてもらおうと思い、必死に書いていたんだと思います。まだたった五才の子供なのに、甘えたい年なのに、くやしくてたまりません。調べていくとあまりにも多すぎて、どれもこれもひどい事件ばかりで、僕はどうしてこんなことが起こってしまっているのか、子供たちを救うことができないんだろうかと思いました。

僕は自分の置かれている環境が、いかに恵まれているのかと、つくづく思いました。僕は父親、母親からたくさんの愛情を受けて育ててもらっていることに感謝の気持ちで一杯になりました。当たり前だと思っていた自分がはずかしいです。仕事が休みの時はスキーや山登りに連れて行ってくれる父。毎日温かいご飯を作ってくれたり、僕が悩んだり迷ったりしていると、そっと背中をおしてくれたり正しい方に導いてくれる母。必要以上にいろんな事に対して心配してくれる祖母。僕は本当に幸せ者だと思いました。

虐待は絶対に許すことのできない、してはいけない行為です。一刻も早く、子供たちを守ることのできる環境をつくらないといけません。同じ悲劇が繰り返されないように、虐待を家庭内の問題だととらえるのではなく、社会全体の問題として、僕たち一人一人が真剣に取り組んでいくことが必要だと思います。子供は、誰かが気がついてあげないと、自ら訴えたり伝えることがなかなかできません。

僕は今回、虐待について考えることができ、これからもっと人を思いやる優しい気持ちをもって行動していきたいと思いました。そして、言葉のもつ大切さも知ることができました。人を傷つけたり、苦しめたりする発言をしないように、丁寧な言葉遣いを心がけていこうと思っています。両親や姉妹、祖母、友達、僕の周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れず、互いに思いやる気持ちを忘れず、互いに思いやる心を大切にしていきたいです。

和歌山地方法務局・和歌山県人権擁護委員連合会主催
第39回全国中学生人権作文コンテスト
和歌山県大会『最優秀賞・和歌山県人権擁護委員連合会長賞』

身近な障がい者に目を向ける

緑丘中学校三年

二〇二〇年に開催される東京オリンピック、パラリンピックまであと一年を切りました。テレビや新聞で色々な障がいを持っている選手の特集をしているので、僕もとても楽しみにしています。このようなパラリンピック選手の特集を見て、実に様々な障がいがあることが分かりました。僕が普段生活している中で出会う障がい者の方といえば、目の不自由な方、車いすの方、知的障がいの方。これらの方々とは道ですれ違うだけです。登校するときにいつも三人の障がいのある方が、女性に引率されてどこかに向かっているのを見かけます。僕はその方々がどこへ向かっているのかすら知りません。パラリンピックの選手のことは特集が組まれて知っているのに、身近にいる障がいのある方々について何も知らない自分にびっくりしました。

一体、あの人達はどこへ行っているのだろうと思い、母に聞いてみたところ、母は

「下田にある障がい者の人達の作業所に通っているんじゃない…？」

と言いました。そこで何をしているのかは分からなかったので、実際にそこに行って話を伺うことにしました。

その場所は「わかば園作業所」という名前でした。ちょうど作業が終わったところで、たくさんの方々が挨拶をしてくれました。僕の勝手な想像で、障がいを持つ人はあまり明るくないイメージがありましたが、全く正反対で、とても明るく活き活きとした方々ばかりでした。登校するときに会う方々に挨拶をしたことはないので、今度会ったら笑顔で挨拶をしてみようと思いました。

園内に入って、障がい者の作業や生活を支援している方にお話を伺いました。

まずは、障がいの種類について教えてもらいました。障がいは大きく分けると三つで、身体・知的・精神があるそうです。今、僕は眼鏡をかけていますが、それも身体の障がいの一つです。僕は眼鏡をかけていないと、みんなと同じように生活できないからです。それを改めて聞くと、わかば園で生活をしている方々が身近に感じられました。

次に、園内の事について教えてもらいました。園内には本当に様々な人がいるそうです。その中でも、障がいが軽い人は外で作業をして、障がいの重い人は園内で一日を過ごすそうです。話してくれた方は、

「障がいの重い人は感情を読みとることが難しくて、何を支援したらいいのかが分からないときが大変なんです。」

と言っていました。毎日接していても難しいのだから、初対面の僕には到底不可能だろうなと思いました。

さらに、障がい者への接し方についても教えてもらいました。一番大切なのは「してあげる」という気持ちにならないことだそうです。障がいを持つ人もそうでない人も、同じ人間として生活をしています。普通に生活をしている人と障がい者を分けてはいけません。だから「してあげる」のではなく、対等な関係で接していけばいいのだそうです。

最後に、障がいを持つ方々と作業をする上で注意していることを教えてもらいました。それは、できない人ができる人に合わせようとするのではなく、できる人ができない人に合わせることだそうです。なぜなら、できる人に合わせようとすると苦しい思い

をする人がいるからです。みんなができることを進めていくことが大切で、効率もよいそうです。

色々と教えてくれた方が

「今から『終わりの会』があるので、是非見学していってください。」

と言ってくれたので、見学しました。部屋に入ると、二十人くらいの障がいを持つ方々がいました。僕はしっかりと目を合わせることができませんでした。毎日支援をしている方々は、握手をしたりずっと手を握っていたりしていました。声をかけて反応がなくても、ずっと笑顔で「対等な関係」で接してしまました。本当に安心できる場所だと思いました。

僕は今まで障がい者に対して偏見を抱いていました。多分、多くの人が僕のように偏見を抱いていると思います。しかし、これから僕は毎日障がい者を支援しているあの方々のようにうまくはいきませんが、少しずつ、障がいを持つ方々と対等な関係を築けるようにしていこうと思います。そんな社会になればいいなと思っています。

まずは第一歩、登校時に会う三人の方々に挨拶をします。

知り、意識することの大切さ

熊野川中学校三年

もし、あなたが周りから不快な思いをさせられた時、「このくらい嫌なことをされたらやめて欲しいと言おう」というラインはあるだろうか。このような時、嫌と思っているがやめて欲しいと言えない人は、人権についての理解が浅いか、人権について理解しているが場の空気を乱す事を恐れていると思う。

最近のニュースや新聞で、よくいじめの記事を目にする。いじめは、忌み嫌うべき人権侵害である。これは誰もが思い、「いじめは良くないよ」と言うことが出来るだろう。こんなことは当たり前だ、と思ったのではないだろうか。その通りである。では、これはいじめだ、と判断する材料は何だと聞かれて回答できる人はいるだろうか。「嫌な思いをさせられている」と考えているのなら、スクールカウンセラーなどに相談するべきだ。人は、確信のないまま行動することが難しい。「これくらいならまだ相談しなくてもいいかな」などという考えはやめた方が良い。これはいじめの被害者に限るわけではない。周りの人も違和感があれば相談するべきだ。「誰かが相談するだろう」という考えをもやめた方が良い。おそらく誰かがそう考えている時点で、ほぼ全員が同じ事を考えている場合が多いからだ。

さらに、周りの空気を乱すことを恐れている人を、その場がまともなら乱れずその訴えを受け入れるだろう。しかし、その場がなんとなくの同調と悪意で作られていたら、話にならないだろう。私は昔、いじめの被害者だった。その時、私は周りに訴えていたが、返って来るのは理不尽さと悪意で、話が通じなかった。このように話が通じるか通じないかの違いは、周りの人権意識の有無か、その意識の高さだと考える。

このように、いじめだけではなく、ほとんどの人権問題には、人権への理解と人権意識が関係していると考える。人権とは、人が人らしく生きる権利であるが、この「人らしく」という考え方は多様である。よって、法律を全ての人権問題に当てはめるのは難しいと思う。大事なのは個人個人が意識し、行動することだ。ある空間を人権意識で満たすなら、その空間にいる人全員に人権

意識を持たせなければいけない。そこで、人権への理解と意識があると、他人に広めやすいと思う。なんとなく広めるよりも人権への理解がある方が説得力が感じられるし、人権意識を相手に表せば、その相手にも人権意識が芽生えるだろう。私はこれから社会に出たとき、人権についての知識と意識を持って社会的弱者に手をさしのべ、人権が守られている平等な社会を多くの人と築いていきたい。